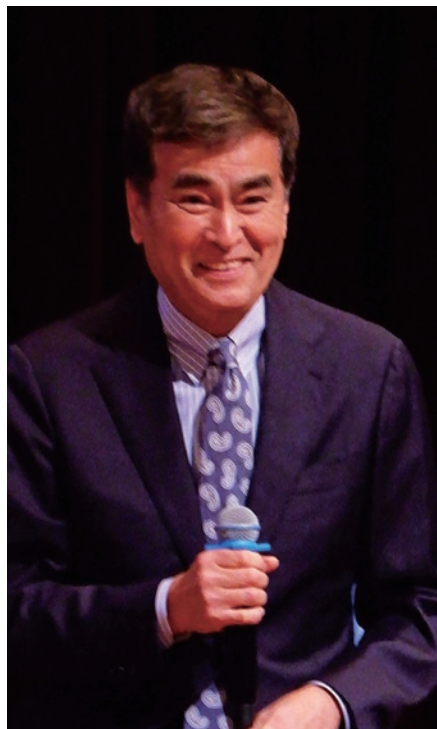




王寺町 次の100年へ リニア開通で変化 未来を語るシンポ

王寺町は11日、町畠田の文化福祉センターで、俳優の石原良純さんや、名古屋大学の森川高行教授らを招き、リニア中央新幹線の開通で変化するまちの未来を語る町制施行100周年シンポジウム「王寺みらい予報—ひと・まち・くらしはどうか—」を開催した。森川教授がリニア開通で都市部への移動時間が減ることのメリットとデメリットを解説。石原さんが実際に試験運行で乗った体験のほか、自身の感じる奈良について語った。

シンポジウムは町民を中心に参加者を募集。約600人が会場を埋めた。オープニングでは町内の子どもら100人が町制100周年記念曲「100年目の王寺へ」を熱唱。また町マスコットキャラクターの雪丸が登場して一緒にテーマソング「Love Love ゆきまる」を披露した。

その後は、森川教授が登壇して基調講演「リニアの開通で王寺はどう変わるか」で、大阪、名古屋、東京都区間でどの程度、移動時間が減るのかなどの基本的なことを説明。そこから県内の話にうつった。

リニア駅を「空港のようなもの」と例え、その駅までのアクセス性で県内地域へのリニア効果が違うとし、「交通の要衝を担う王寺町は有利。名古屋や東京への通勤・通学、コンサートなどの娯楽が可能になる」と述べた。加えて、王寺町は住みたいまちでの評価が高く、住宅地としての価値がさらに高くなると分析した。

その一方で、企業や労働力、買い物客などが外へ流れる可能性が高いことも示唆。2008年から2017年には新幹線が走る兵庫県から大阪府、そして東京都へと企業が転出した例も出して説明した。

最後に、それを防止するための方法として、地域の独自性が鍵になると力説。リニア駅奈良駅の候補地とも大阪とも交通面で有利な特徴をいかして、すべ

ての地域をつなぐ「ハブ」していく未来を提案した。

トークセッションでは「つながる、ひろがる、王寺の未来」と題して、石原さんと森川教授、平井康之町長が登壇。司会をフリーアナウンサーの八木早希さんが務めた。

「まちとくらしの歴史と発展」「進化する鉄道のまちリニア開通を見据えて」「未来の王寺町を描く」の3つのテーマについて語った。

現在では交通の要衝を担う王寺について平井町長は、1890年に久度地域に開業した「王寺駅」が転機になったと話し、「当初は竜田地区に開業する計画だったが、当時、煙を出して町中を走る機関車をよく思わない地元の人からの反対があり、久度にできた。そういった幸運もあり、その後、大阪につながりベッドタウンに成長した」と説明した。

王寺の未来については石原さんから「奈良の漢字は難しい。パンフレットであれば、すべてにルビを振ってもらわないと出てくるたびに読めない」と話すと、会場から笑い声が起った。

最後に平井町長は「移動時間も短くなり、DX化も進んでいることで、住むところを選べる時代になる。いかに選ばれる価値を準備できるかが大事。子育てしやすい環境と、教育のまちづくりで選ばれる王寺にしていきたい」と決意を語った。



子どもらの熱唱に、雪丸も登場



町民や関係者ら約600人が会場を埋めた



シンポジウムの会場になった町文化福祉センター